



# コロロスツール (ミナペルホネン "dop" タンバリン柄)

## ドールハウス チェア by トラフ建築設計事務所

イチロが2012年に発表した初めての家具が「コロロデスク」と「コロロスツール」。大人でも子どもでも、自分の“居場所”が作れる家具”を目指して、トラフ建築設計事務所とともに時間をかけて開発したイチロの大切な商品だ。中でも早々に欠番となってしまったのが、ミナペルホネンの生地「タンバリン柄」を使ったコロロスツール。このたび、ミナペルホネンから発表されたインテリアファブリック "dop" の「タンバリン」を使ったコロロスツールを販売する。実はこの生地、両面モールスキン製のダブルフェイスになっていて、表がすり切れてきたら裏の色が見えてくるというもの。家具に使う布は、長く使うとどうしても生地が擦り減ってくるので、擦り減っても次に新しい色が表れることで経年変化を楽しんでもらいたいというコンセプトなのだ。ミナペルホネンの皆川明さんとトラフ建築設計事務所の鈴野浩一さんがイチロのために選んできたのは5色。座面の下にもものを入れられるコロロスツール。下の生地の色が見えてくるまで、長く使って欲しい。



コロロスツール (ミナペルホネン コラボレーション)  
dop tambourine (ピンク、イエロー、ブルー、グレー、インディゴ)

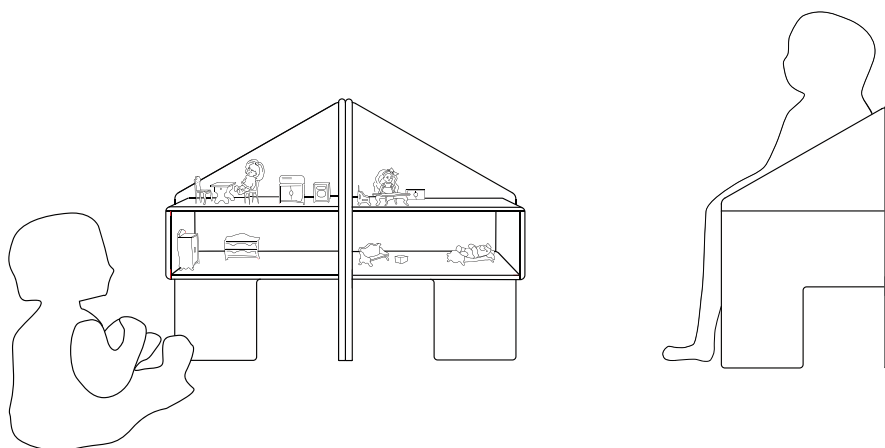
ドールハウスとして遊んでもいい、収納してもいい。それが椅子になる家具

トラフ建築設計事務所とイチロがよく話すのは、「子どもの頃の発想が大人になっても感じられる家具はいいね」ということ。大人でも子どもでも遊び心はとても大切。押し入れを基地に見立てたり、椅子の脚が操縦桿に見えたりと、子どもの頃の発想は実に伸びやか。また、子どものために自信を持って贈れる家具も考えたい。だけれども、「子ども用の椅子や机を探していると、“その後も使えるかな”とか“ずっと置いておけるかな”と考えてしまうんですね」とご自身もふたりの女の子の父親でもある鈴野さんは言う。そこで、今回発表するのは、ドールハウスとしても使えて仕舞えば椅子になる「ドールハウス チェア」。これはトラフ建築設計事務所でのインターン中のポーランド出身のアリツァ・ストジジンスカさんの修士制作のアイデアをもとにつくったもの。開けば三角形の屋根をもつドールハウス。閉めれば椅子になって座れる。子どもでなくても文庫本や小物を収納することもできる。子ども用としてだけでなく、大人になっても使えるし、大人が使ってもかわいい。出会った家具とどれだけの時間と過ごすことができるか。そんな家具づくりをトラフ建築設計事務所もイチロも考えている。

### PROFILE

トラフ建築設計事務所 (<http://torafu.com/>)

鈴野浩一(すずのこういち)と禿真哉(かむろしんや)により2004年に設立。建築の設計をはじめ、ショップのインテリアデザイン、展示会の会場構成、プロダクトデザイン、空間インスタレーションやムービー制作への参加など多岐に渡り、建築的な思考をベースに取り組んでいる。2011年「空気の器の本」、作品集「TORAFU ARCHITECTS 2004-2011 トラフ建築設計事務所のアイデアとプロセス」(ともに美術出版社)、2012年絵本「トラフの小さな都市計画」(平凡社)を刊行。



ドールハウスチェア

サイズ：未定 素材：未定

(11月下旬 発売予定)

# SHIBARI

by 長坂常（スキーマ建築計画）

ウレタンスポンジをぐるっと巻いて、紐で縛って、ラバー塗料に浸ける。「SHIBARI」と名付けられたスツールは、建築家長坂常さんがアムステルダムスのロイド・ホテル（Lloyd Hotel）のためにデザインしたものの。2014年4月のミラノ・サローネでお披露目したこの製品をこのたびイチロから販売する。

長坂さんがロイド・ホテルのラウンジのためのデザインを依頼されたのは2013年のこと。ちょうどイチロの家具コンセプトづくりを行っていた長坂さんは、竹と他の素材を組み合わせた家具を構想していた。その製作にイチロが関わり、イチロが竹かご製作をしていた頃、長坂さんはさらに「竹+スポンジ+ラバー」を組み合わせたさまざまな実験を繰り返していた。そのうち、徐々に竹は不要になり、最終的にスポンジを縛ってラバー塗料を塗るだけという、力強いコンセプトのスツール「SHIBARI」が誕生したのである。

## シンプルなアクションから生まれた家具

1/5スケールの「SHIBARI」を見た瞬間にイチロは魅了された。ありふれたスポンジ素材が縛ただけで家具に変貌するダイナミズム。発想もつくり方もシンプルなものだけに存在感が強烈で、縛り方でさまざまなカタチが生まれる。座ってみると、堅すぎず柔らかすぎない適度な座り心地だ。

ミラノ・サローネで展示した後、ロイド・ホテルに納品する商品をイチロが製作。その後もスポンジからラバー塗料から、さまざまな試行錯誤を経て、ようやく商品として自信をもってイチロから販売できるものとなった。座り心地を試してもらいたいスツールである。



SHIBARI #1 SHIBARI #2

サイズ：W550 × D700 × H450

カラー：ブラック

素材：ウレタン、紐、ラバー塗装

(11月下旬 発売予定)

## PROFILE

長坂 常（スキーマ建築計画 代表）

1998年東京藝術大学美術学部建築学科卒業。同年、スキーマ建築計画開設し、その後、2007年事務所を上目黒に移転し、ギャラリーとショップなどを共有するコラボレーションオフィス「HAPPA」を設立。 <http://schemata.jp/>



# Glassbead Holder

by 角田陽太

ガラス玉による重みでものをはさむ「ガラス玉ホルダー」は、プロダクトデザイナー角田陽太さんがロイヤル・カレッジ・オブ・アートに留学していた時にみた活版印刷工房の印刷物を乾燥させる仕掛けから発想を得ている。「重力だけでもものをつり下げる美しさに惹かれて、いつか重力だけのプロダクトをつくってみたいと思っていたんです」と角田さんは言う。この美しい知恵を現代の生活のシーンに取り入れることはできないかと試みた結果、ペーパーホルダーとしても、タオルホルダーとしても使える小さな製品になった。こうした昔からあるもののなかに潜んでいる知恵や機能や美しさを咀嚼して新たな命を吹き込み、現代のプロダクトとして命を吹き込む方法を角田さんはよく使う。イチロの「スコラデスク」も「CHABU」もそうだ。



古いものに培われているよい部分を現代に活かす

「スコラデスク」はイギリスの小学校の机にインスパイアされている。上蓋を開け閉めできて上からものを収納する。小学校の机では斜めだった上蓋をフラットにしているのは、「筆記のための斜めだったと思うんです。黒板をみながら文字をみていくという行為に向いているからだと思うので、いまはコンピュータをタイプするので平らにおきますから」。

「CHABU」も日本の家庭で昔から使われてきたちゃぶ台を“しまえる家具”として再考しなおしたものだ。足の建て方は昔のまま、現代的な美しさに整えなおした。「グラスビードホルダー」も形状をリファインして、できるだけサイズはミニマムにしなおしたが、針金の形状はそのまま使っている。「古いものにはやっぱり秘密があって、変える必要のないのは変えない。それがベストの選択だと思えば残す。考え直す余地があれば考え直す」。

角田さんは骨董市によく行く。古い椅子や瓶、文具などの日常品を徹底的に見る。見たことのない道具だったり、かたちだったり、用途だったり、素材、そしてそのものがまとっている雰囲気みたいなもの。「捨てられないで歴史を勝ち抜いてきたものはなにかしら強いし、ものとしての能力が高い」と角田さんは言う。そのものが持つよいところを見極めた上で、「自分ならこうする」を考えていく。「ディテールの積み重ねが上質な生活につながると思っている」という角田さんは、昔のものと一緒にいても違和感がないものをつくりたいと言う。重力を利用して挟む「ガラス玉ホルダー」もその雰囲気をまとって



スコラデスク



CHABU

## PROFILE

1979年仙台生まれ。2003年渡英し安積伸&朋子やロス・ラブグローブの事務所経験を経る。2007年ロイヤル・カレッジ・オブ・アート（RCA）デザインプロダクト学科を文化庁・新進芸術家海外留学制度の奨学生として修了。2008年に帰国後、無印良品のプロダクトデザイナーを経て、2011年YOTA KAKUDA DESIGNを設立。多岐にわたり国内外でデザインを発表している。武蔵野美術大学非常勤講師。



Glassbead Holder (ガラス玉ホルダー)

サイズ：W25 × D50 × H50 素材：ホワイトアッシュ、ビー玉、針金  
(11月下旬 発売予定)

# TOTE

by DRILL DESIGN (林裕輔+安西葉子)

美しい本やお気に入りの本は飾っておきたいもの。壁面にオブジェや絵を飾るように本や雑誌を飾れるブックシェルフ「TOTE」は、一本の木材と一本のステンレスフラットバーというふたつのパーツというシンプルな構造で成り立っている。まずは一本のリボンのように曲げられたバーを壁に取り付ける。それから木材を壁とバーの間に入れる。そうすればステンレスフラットバーは木材を壁に固定する取付金具であると同時に、本の落下防止バンドとしての役割を担い、本をしっかりと抑えてくれる。

2012年に丹青社のプロジェクトで発表された「TOTE」を見て、イチロはこのシンプルな発想の力強さと壁を楽しむアイデアに共感した。ステンレスフラットバーの色と木材の色との調和、一般の家庭でも使えるようにサイズなどを再考して販売することになった。

壁が楽しくなると、家も楽しくなる

「TOTE」という名前は、トートバックのように気軽に本を入れられるシェルフ、というところから名付けたと安西さんは言う。「これは部屋の中が楽しくなるようなもの。リボンのように三次元に曲げられたステンレススチールがまるで持ち手みたいでしょう？ トートバッグに入れるように、気軽に本や雑誌を入れるシェルフなんです」。壁だけでなく、扉についていてもいい。いくつも色をあわせて壁を飾ってもいい。お気に入りの本や雑誌やプリントなどを気軽に立てかける、トートバックのような気軽さで、壁を飾って欲しい。

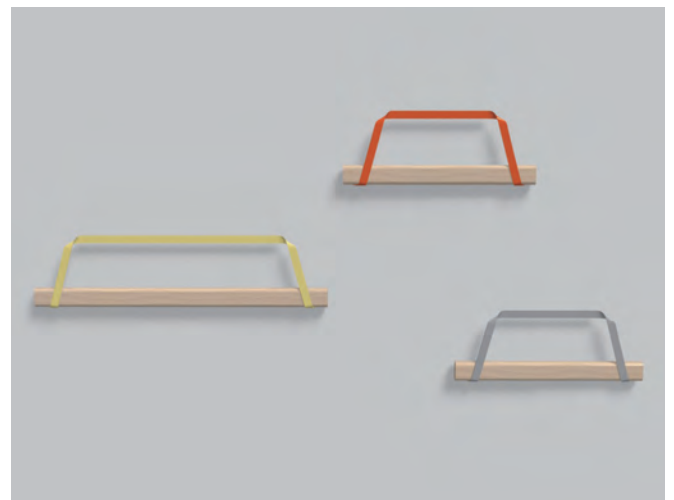
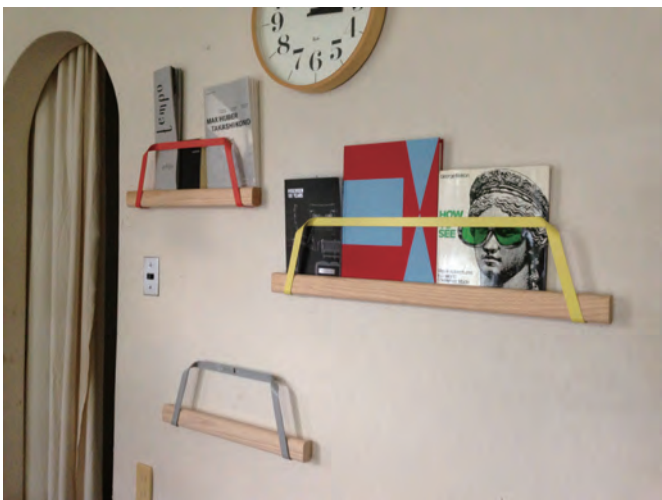
## TOTE

サイズ：大= W777 × D40 × H192、小= 515 × D40 × H192

素材：ホワイトアッシュ（オイルフィニッシュ）、ステンレススチール、

カラー：レッド、イエロー、グレー

(11月下旬 発売予定)



## PROFILE

DRILL DESIGN / ドリルデザイン

林 裕輔と安西 葉子によるデザインスタジオ。2001年設立。プロダクトデザインを中心に、グラフィック・パッケージ・空間デザインなど、カテゴリーを超えてデザインとディレクションを行う。デザインは目的ではなく未来をつくる手段という考えのもと、クリエイションから広がる新しい可能性を探っている。



# Plywood Pony

by 野本哲平

デザイナー野本哲平さんの工房は、工作機械をスピーカーメーカーや木を中心としたデザイナーがシェアする新木場のビルの一隅にある。「新木場というまちが好きなのもあるけれど、これまでの建築家やデザイナーの動きと違うことをしたいというのもあって」と野本さんは言う。「例えばオランダのデザイナー、ピート・ヘイン・イークは工房をもって、自分で作りながらデザインしている。レンゾ・ピアノも木工機材を持って、一分の一をつくりながら考えるそうです。日本ではつくることとデザインすることを一緒にできる工房はほとんどないので、自分は基本的に手で作りながらかたちを考えるとこの働き方をしたいと思ったんです。素材感は本当に手で触っていないとわからないし、そうでないと、作り方が2の次になってしまうのがいやだなあ、と思うんです」。とはいえ、木材だけこだわっているわけではない。だが「誰でも使えるところが木のいいところだから」。

## 愛らしい子馬のようなトレスル（架台）

イチロが惚れ込んだのは、野本さんが2012年に発表した、まるでポニー（子馬）のように足をふんばるかたちが愛らしい合板のウマ（トレスル）。「通常、使う合板は通常15mmとか18mmとかですが、スケートボードに使う合板はすごく薄いんですね。合板の薄さの限界をつきつめてもいいと思って、紙の工作と木工の間くらい存在感を考えてみようといういろいろやっているなかのひとつ」。ウマの上に天板を載せればダイニングテーブルにも、仕事用の机にもなる。スタッキングも可能なので使わないときも省スペース。来客時や展示会、たまの打合せの時など、ありとあらゆる仮設のテーブルや台として、場合によっては腰掛けとしてフレキシブルかつテンポラリーな使い方ができる。

「至れりつくせりのフレンドリーなものではなく、ハードけれどもものすごく冴えているような、ビシビシ冴えた感じがたわってくるような、そういうものが好きですね。すぐ使える便利なだけのものじゃなく、自分で仕込みという調整を経て“道具”として使うものがあった方がいいんじゃないかな、と思います。イチロのコンセプトである“まかない家具”の考え方に近いと思う。それに、そうだな、江戸前寿司みたいなプロダクトをつくりたい。切れるハモノで加工して、すぐ売る。これも“まかない”の感覚ですよ。そういうものをつくりたいな、と思っているんです」。

Plywood Pony（プライウッド・ポニー）

サイズ：大=W800×D262×H690 素材：ラワン合板・ホワイトアッシュ

（11月下旬 発売予定） \*写真は2012年に発表した原型



### PROFILE

1980年茨城県生まれ。東京造形大学デザイン学科環境計画建築専攻卒業後、社会人を経て武蔵野美術大学建築学科、職業訓練校で木工を学ぶ。建築を軸に、ラジカセから木工、衣服から都市まで、生活への幅広い興味を軸に活動。2011年7月、「現代民具」というアプローチから生活様式全般を考察するレーベル「民具木平（みんぐもくへい）」を立ち上げ、製品の企画・デザイン・製造・リリース等を行っている。

小さい頃からミニ四駆にペットボトルをつけて水陸両用に改造して水の上を走らせたりして遊んでいたという野本さんが“現代民具をつくる”というコンセプトで「民具木平」を立ち上げたのは、現代の“人が生きていくための道具”を考えていきたいからだという。「例えば、iPadは現代民具だと思うんですね。ツールとかエキップメントとか、人が生きていくための生活に意味のあるもの。高い材料で手間のかかった家具をつくって売ってもいいけれど、それだけじゃないことがある。中途半端なものじゃなくて、ものすごくナンセンスなものとか、ものすごく人のためになるもの。意味のあることをやりたいんです」。現代美術が好きなのも、「美術は意味がないようだけど、人の人生を変えてしまうようなところがあるから」だという。



# Half Throttle Shelf & Table

by Design Soil (岩元航大)

「Design Soil」は、神戸芸術工科大学の田頭章徳さん率いる学生有志によるデザインプロジェクト。国内外のデザイン展に精力的に発表するたびに、柔軟な課題設定と解決に向かう学生たちの態度に注目していたイチロは、「デザインの最前線を教育とつなげることで、学生たちの創造に還元していく」という田頭さんの思いに共鳴し、2013年度から「Design Soil」と共同研究を始めた。その中で、商品化第一号になったのが、この9月からスイスのECALに留学した岩元航大さんの「ハーフスロットル」シリーズ。組み立てが簡単で、脚を45度の角度にひねるだけで棚が固定される棚のアイデアは、2013年のミラノ・サローネで発表された。それを原型に何度も試作を重ね、棚の間のスペースや高さ、見た目など、渡欧直前まで検討を重ねた。岩元さんにとっては生涯最初の商品化。イチロにとっては初めての大学との共同開発。最後の最後にローテーブルのアイデアも生まれ、手応えを感じている。



## 新しい組み立て家具「ハーフスロットル」

岩元さんの発想の源は、「大量生産され安価で手に入るような組み立て家具は、いざ組み立てようとする、ビスなどの細かなパーツが何十種類も必要で、手間が掛かるし素材も安っぽく、捨てられることを前提に売られているように見えました。かと言って、昔ながらのずっしりした棚は、気軽に移住したり引越したりすることの多い現代の生活には不向き。そこで、最低限の要素で成り立ち、かつ簡単に組み立てられるようなミニマムな棚を考えました」。一番苦労したのは、脚の溝の精度。脚の溝を天板の穴に合わせて45度ひねる際に、最初はスムーズにまわり最後はしっかりと天板を噛むように溝を調整することに時間がかかった。

イチロは才能を大切にしたい。デザインのためのデザインではなく、消費者が生活を自分で編集して楽しめるような新しい家具のあり方を、若い才能と生み出していきたいと考えている。

ハーフスロットル・シェルフ

サイズ：W800xD350xH710

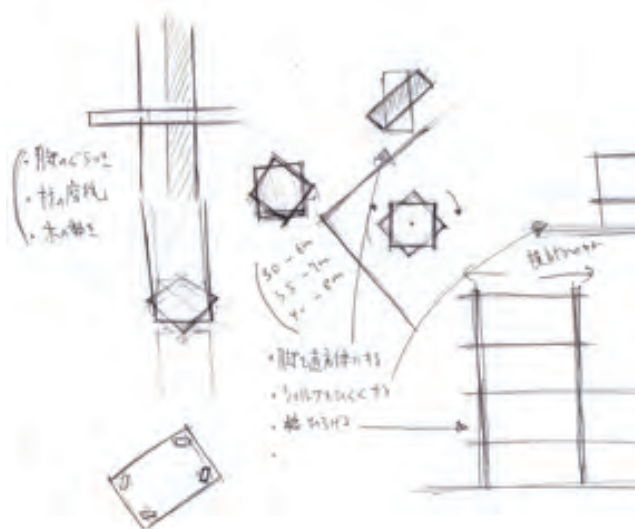
素材：シナ合板、メラミン化粧板、  
ホワイトアッシュ

ハーフスロットル・サイドテーブル

サイズ：Φ450xH450

カラー：ホワイト

(11月下旬 発売予定)



## PROFILE



田頭章徳 Akinori Tagashira

1979年長崎県生まれ。九州芸術工科大学大学院修了後、E&Yに入社。2010年より神戸芸術工科大学プロダクトデザイン学科助教。同年学生と共に活動するデザインプロジェクト「Design Soil」を立ち上げる。2011年からミラノサローネに「Design Soil」の作品を出展し続けるほか、Design Soilとして企業との商品開発も手がけるなど、活動の幅を広げている。

<http://www.designsoil.jp/>



岩元航大 Kohdai Iwamoto

鹿児島県生まれ。2009年神戸芸術工科大学プロダクトデザイン学科入学後「DESIGN SOIL」に在籍し、イタリアのミラノサローネやフィンランドのハピターレ等、海外の展示会に多数参加。現在はスイスのEcole cantonale d'art de Lausanne(ECAL)のMaster in Product Designに在籍中。